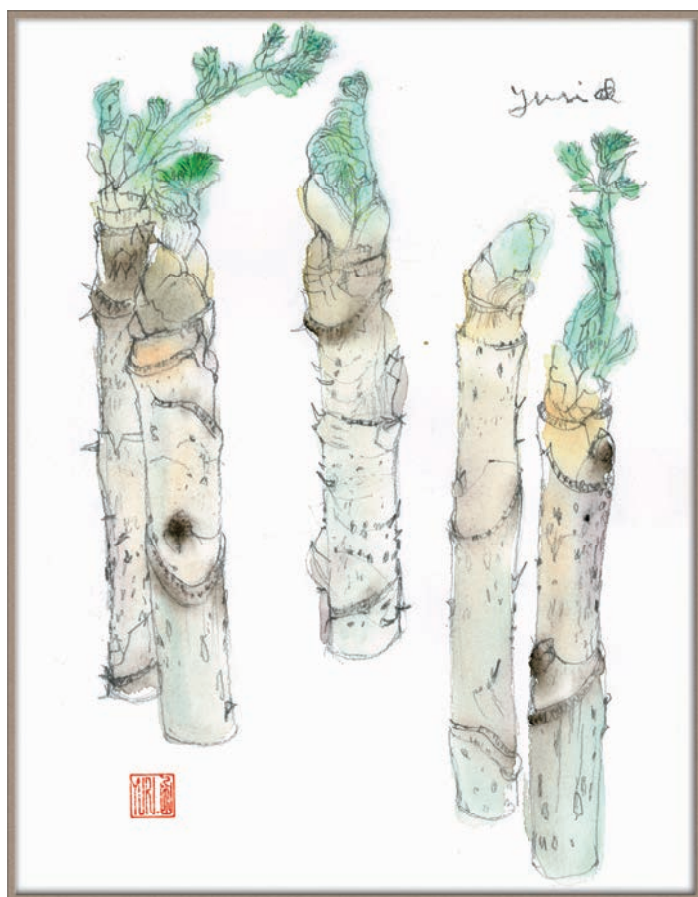


三河アララギ

2022年 令和4年5月 皐月
さつき

五 月 号

第 六 十 九 卷 第 五 号



ニューヨーク日記(187) <http://blueshoe.copetin.com/>

BlueCat, Shoe Lady

ALWAYS ALWAYS HOME

Blue Shoe Diaries



自粛中の今一人（一匹）になれる時間を失ってしまったシャーロック、嬉しいんだかうざがってるんだかよく分からない！人間としてはお出かけしない楽しみなんだが。今のところ側でこんな感じに欠伸するぐらいだから喜んでるのかなあ？基本寂しがり屋さんだもんね。

I wonder. Is Sherlock the kind of cat that is loving having his human around all the time now that we are all social distancing? Or is he finding this an invasion to his space and annoying? I'm not entirely sure... but this is the best part of staying at home for me, the human. The fact that he still comes nap by (on?) me makes me want to think he's loving it.

目次

第六十九卷第五号(通巻八二二号)

表紙・櫛の芽

今泉 由利 (1)

ニューヨーク日記(187)

Blue Shoe (2)

歌集 わが冬葵

御津 磯夫 (4)

歌集「續々草々」

今泉 米子 (5)

時・浦生野

夏目 勝弘 (6)

「歌集八千代」

岡本八千代 (8)

伊賀まんじゅう

弓谷 久子 (10)

千の手

今泉 由利 (12)

真実

安藤 和代 (14)

きびすを返す

山口千恵子 (16)

貝塚伊吹

清澤 範子 (18)

メジロかな

杉浦恵美子 (20)

豪華には

伊藤 忠男 (22)

夏目先生を偲ぶ

白井 信昭 (24)

神様に捧げる

矢崎 直人 (25)

『いとよせ』

いーはとぶ

山崎 俊子 (26)

伊藤 晴江 (26)

三田美奈子 (26)

現代学生百人一首

東洋大学

藤澤 怜奈 (28)

塚本 愛菜 (28)

デンシニール春 (28)

野村 百花 (28)

鈴木 彩音 (29)

湯本 蓮 (29)

小林 千華 (29)

藤原 史奈 (29)

高橋 育郎 (30)

矢崎 直人 (32)

植村 公女 (32)

水野 絹子 (26)

牧原 規恵 (26)

稲吉 友江 (27)

鈴木美耶子 (27)

吉見 幸子 (27)

牧原 正枝 (27)

森 厚子 (27)

木村 歩歩 (32)

今泉 如雲 (33)

今泉 由利 (33)

丸山醉宵子 (34)

山本紀久雄 (36)

今泉 雅勝 (38)

本田 勇氣 (40)

江上 浩二 (42)

花野みぶり (44)

中屋 保之 (46)

横山 精真 (48)

今泉 由利 (50)

玄翁 (52)

岡本八千代 (54)

岡本八千代 (55)

今泉 由利 (56)

(58)

「三河アララギ」について

続「昭和こどもの四季」

『俳句』

本田カイロプラクティック先生の春夏秋冬

「江上浩二の独り言」

初狩便り6

『隠蔽』

魯国の武力侵攻を憤る

郊行

康鍼治療院

「氷魚」のことから(50)

「氷魚」のことから(51)

編集室だより

「三河アララギ」について

歌集 わが冬葵

御 津 磯 夫

足腰のさだまらなくに指^さしてゆく憑^つかれしごとく山田寺の趾

櫃の實のひとつのいのち拾ひ来て國の肇^{はじめ}のあとをけふゆく

御手洗^{みたらし}に水照り反す汀には異國の白鳥を飼ひ汚したり

鞘堂^{さやどう}の中の石文を格子戸に額^{ひたひ}ひた押しなほ讀みがたし

石にのこる文字は細書きの楷書にて冤罪^{えんざい}雪ぐまことこもれる

見臺に對ひて正坐の繪なりけり幼きよりわが知る貫名^{ぬきな}海屋^{かいおく}

菰翁^{かぶち}の手の跡のこる寺の址蕪^{うね}の畝^{うね}みじかし冬に入る青

青石の板碑の文字のうすれつつ光射し入ることもなからむ

珍しく各駅停車にけふは乗らむ冬日の光やはらかくして

玉野川瀬々の鳴る音なきごとく白々として流れ去りゆく

歌集 「續々草々」

今 泉 米 子

ドラセナの垂り葉の先の朝露の光りて落つるところまで見ず

綿入れの半纏としてわれは着る六十年前の大島紬

黒く光るウイスキーの瓶洗ふ白玉椿のましろを挿さむ

今日われの点滴刺すは孫にしてその親の手のごとくたくみに

米国より来りてたちまち作りたり老いの二人の今宵の夕餉

中庭の空にたゆたふ鳶一羽しばらく仰ぐ休診日にて

呼吸音無き右の胸を撫でてをり庭篁にこもる風音

休診日のひとりたのしも庭隅に音こそなけれ今年の土筆

中庭をよぎりゆくにも考へて対角線をわれは歩めり

片なびく篁は寒やけの赫きいろ縁の日ざしの移りゆきつつ

時

夏 目 勝 弘

一時間まだ眠れるとおもむろに部屋の闇に目を閉づる

外燈のオレンジ色が窓すみに体の目覚むる時を待ちをり

ときどきに雨音大きくなりてきぬ我が休日は雨の日多し

落葉するとき過ぎにけり未だまだ枯れ葉の残るは立ち枯れの木ぞ

我が行きに左右に別れしキジバトが藪の繁みに同時に入りぬ

田に畑にカラス多く戻りきぬ巢造りのときかワラクヅ運ぶ

金銀にトキの声あぐ自国民昂ぶる心我に失せをり

たちまちに乱るる今日の飛行雲時差ある人の乗りゐる便か

庭松の植ゑ変へどきもあとわづか明日の休日また雨の予報

庭松のめぐり堀りゆくそのときに小さきカナヘビスコップに動く

蒲生野

白まさる近江の花と三人みたりおみなの女万葉人に逢へし思ひす

紫の匂へる三人の近江の女大海人皇子は人妻恋ひにき

甘き菓子をいただき近江の電車しばし楽しき思ひにひたる

薬くすり獵は旧曆五月の五日なりき近江富士は逆光の色

薬獵に興じし原野の広びろし田畑となりて春耕のとき

赤松の木の間に見ゆる蒲生野の原野に愛あふ男女の遊び

ささ波の比良山風の今日吹かずえり鰯にいざよふ波の見られず

宿りなき勝野かちのと歎きしは万葉人我はコンビニ探しあぐねし

淡海の海の桜の下をひとめぐり青春キップはありがたきもの

安曇川あどがわをひたすら下り水門みなとまで西日あるうち帰路につけたり

「歌集八千代」

蒲郡 岡本八千代

ひとりむすこひとりむすめの我等にて両つの家を継がねばならぬ

旧姓の牧原のままに十年間中学教師を勤めてゐたり

入学より一言も言はぬ子がひとり鼻拭きてやる放課のときに

母とわれと語らひつつむく青き露の匂ひただよふこの厨べに

患ひて幾年を過ぎし母の指われよりも軽く露の皮むく

天然色に写したまへる鳳凰花の紅あかあかと輝きにけり

吾も共にこの鳳凰花を賞めゐたり朝逝きたまふ命と知らず

君の机のメモカレンダー風にめくれ「萩の花こぼるる」といふところ

農場の麦刈作業の生徒らについてゆくなり救急箱さげて

膝に当てて結ぶ束よりぼろぼろとこぼるる麦を一粒づつ拾ふ

この麦を収め終はれば町に返す学校農場なり我も落ち穂拾ふ

幸福を受くる資格への彼の疑問を説き始めしところにて終業ベル鳴る

お辞儀すれば烏瓜落つるしかけてわれを驚かす中学二年生

宿題に出ししペンペン草のひととを無口なる幸子が持ち来てくれたり

朝露にぬるるなづなを摘みながらわれも生徒と登校をする

伊賀まんじゅう

豊川 弓谷 久子

母手作りの伊賀まんじゅうを思い出す桃の節句の抹茶一服

今日のすしはみさとのおごり中トロの鮪に鮑帆立てが並ぶ

小学校の同級生が奥さんと訪ね来てくれたり逢いたくてと

君も我も生き残りをり故郷の小川で遊びし幼な馴染みよ

河津桜の一枝を子がくれ行きぬ伊豆への旅のあの日を想う

土曜日の早朝番組「あの人に逢いたい」今朝は寂聴さん

今日をせつに生きよの法話身に沁みる生き給ひたり九十九歳

得度されし後のエッセイ幾冊か愛読書なりき読み更けりたりき

遠目にも白じろ見ゆるは木蓮の大木ならむ今花盛り

三回目のワクチン接種の日となりぬ何時まで続くかコロナ禍の世は

生活に追はれし我の一生を働き者と子は作文に書く

お宮様の桜が今日は咲き始めたと買物帰りの子の一声

幼き頃の遊び場なりし神社の桜子には一番身近な春か

戦争は駄目だと声あげ叫びたし悲惨な思い出のみよみがえる

不穏なる世相なれども満開の桜のニュース弥生月の尽

千の手

東京 今泉 由利

三河より奄美大島より巡り逢ひまた逢ふために今日を別るる

あのこともこのこともまた過去にして明日ははじめむ未来といふを

大幅に歩みゆくゆく恵比寿道今日の歩数に至らむために

関東ローム層に建つビルディングひとり住みつつひとり安らぐ

関東のローム層のま白き独活よ手造り味噌を少し添へる

日本語の通じる故に心安し京都にゆかむ大阪へ行かむ

花びらはまろまろまろ吹き溜るあるか無きかの重量掬ふ

のりこえてゆきはしない常に地球の丸み見ゆる範囲を

しばらくは見下ろしをりぬ羊雲ひとつ羊を突き抜けて着地

物思ふ心も高き空にあり常の心と少しことなる

千の手の一つ一つのお道具のひとの心の則を越へない

まどかなる金の輝よひ輝よひて私におよぶ金の輝よひ

8Bの鉛筆より出づわが線はほくほく今年の馬鈴薯となり

墨を擻る墨匂ひたつ濃く淡くひと筆にして人の姿を

まっ白し燕をむきゆくまっ白し一番だしに少し色づく

真実

豊川 安藤 和代

早朝に出勤する孫のポケットにカイロをひとつそつと入れたり

陽だまりの寄り添いて咲く水仙にかの日の吾が家思いでいたり

外出もままならぬ今電話なりあの友この友話は弾む

「おしゃべりさん変らないね」と笑う友受話器にぎりてもう一時間

朝寒むの庭の紅梅きのうより小さく小さく膨みの増す

ジーンパンの破れもひとつのファッションと笑いて孫は友と出でゆく

コロナゆえ老いの集いの「元氣会」休み続けど梅は満開

手編みなる友からのルームソックスは体ぬくぬく心も踊る

夢であれ間違いであれと祈りしを真実むなし師は逝きたもう

頑張れと励ましてくれし師の逝きて椿の花の紅も悲しい

山鳩はしきりに鳴きて誰呼ぶや弥生の空よ雲ひとつなし

花冷えの夜はしんしん娘のくれし電気アンカに温ぬくと寝る

食卓にペンと紙とをとめ置きて調理まに間に詠む厨うた

タラの芽ののぞきし庭よ大原もトラクターの音せわしくなりぬ

綿虫かと見間違うよな粉雪が弥生半ばの庭に舞いおり

きびすを返す

豊川 山口千恵子

そそくさと勤め帰りに娘来て食材などを置きてゆきたり

風もなく物音もせぬ日の暮に突然の如く五時のチャイム

わが姿みてとどまれる黒き猫しばらくの後きびすを返す

窓の外忽ち暗くなりにつけり早や二月なりと立ち上がりたり

酒かすにて作りし甘酒おいしかり生姜をすりて熱きをする

肺炎になりて入院せし夫面会かなはずただ思ひをり

一人居るひと日は長し話もなく集金の人と日和のはなし

つくしなど顔出してゐぬかと思つて行く午後暖かき田続く道

バイパスを車つらなりはしりゆく沈みゆく赤き夕日の下を

人住まぬ家に終日ともる明かり夕暮れま近か前通りゆく

挨拶をかはし共に通りすぐ誰ともわからぬマスクしてゐる

細く長く焚き火の煙立ち昇る人ゐぬ川原に小さき炎

呼出し音一回鳴りて切れし電話しばらくの間気になりてをり

昨夜降りし雪うつすらと屋根おほう朝新聞とりに出で来し

甘ずっぱき苺そへたるパンケーキ春めく昼の喫茶店に

貝塚伊吹

春日井 清澤 範子

吾朝に赤青黄と十二種の薬をのみて一日が始まる

ガラス戸越しに庭を見てをり剪定を終えし椿芽を出しゐて

亡^つ夫なき後やりくりは娘が受け持ちて老いては従^まと言ふも

由利先生の表紙画思ひ出す今年のお料理家計簿桜の花の

結婚をせず経理一筋に暮しこし娘は吾が身を支えてくれる

庭のハツ手虫にくわれた葉もありぬ剪定してより又伸び来て

貝塚伊吹に止まりしウグイス鳴く日和今日も一日頑張る吾は

二人だけの思い互にちがう時娘にゆだねる事もありたり

斜視の手術順調に回復してをれど顔を洗うとき右眼ゴロゴロ

独身にて過ぎきし娘も腰痛の病ありて吾二人共

西高東低の朝なり千両の赤き玉にも雪は積れり

屋根を越し勢ひ伸びし貝塚伊吹に巢のあるらしき小鳥飛び立つ

庭の空に小鳥チツチと鳴く中にカラスの声混じるを聴きぬ

満月の空は茜に染りくる庭の椿に夕陽照らすも

メジロかな

蒲郡 杉浦恵美子

グリーンハンドと正反対の我なれど風呂場のアイビー思へば十年

椿木が風のないのに揺れてゐるかく見るうちに番の鶯

メジロかないやいや違ふ鶯そケキヨと鳴きたり椿の葉陰

我が庭の椿に鶯訪ね来て番が交互に花蜜吸へり

鶯が我が裏藪にまで至るとは三ヶ根山には餌乏しきか

新聞はコロナ禍及びウクライナ無力さ抱へて鶯聴きをり

目を背けたくなる無残ウクライナ侵略といふ想像力の欠如

人一倍怖がりなりき母居らばこの情勢を如何に思はむ

夫居らば如何に言はむかこの現状今こそ共に語りたく思ふ

雨上がり五井山ひと際近く見ゆ山褰くつきり旅ごころ湧く

長いこと遠出などしていないけどこうして五井山憧るのも旅

弁当を何処にて開かん捜すうち百々を過ぎて高松一色

知ってゐるつもりが迷ひぬ渥美道ビニールハウスの列なり遙か

土付きの筍戴く早朝に竹藪分け入り堀りたるものか

十日間の隔離生活経たる人お勧めしませんさらりと言へり

豪華には

大阪 伊藤 忠 男

豪華には程遠きかな我が庭の一本桜花まばらなり

目は千里耳は地獄で鼻は何匂いかぎ分け命を守る

七回忌過ぎし時とて過ぎぬまま今も庭から母の呼ぶ声

仏壇に合わすその手の皺を見る我も傘寿の歳になるなり

かの町の水に火なく電気無し銃撃音より我は幸せ

今朝寝起き耳をそばだて窓開ける小鳥鳴く声逃すまいとて

小川沿い風音笹の擦れる音流れの音に指揮を任せる

産卵期うつすら紅さす桜鯛春の食卓飾るを惜しむ

一陣の風が織りなす花吹雪優雅なるかなか可憐なるかな

水面を覆う「アオコ」悪者として祖先地球の救世主なり

植物の五感鋭き人以上聴覚味覚視覚すらあり

一瞬に虫をとらえるモチツツジ粘液出して掴む技あり

愚かなる人の振る舞い己が己滅ぼす道を進むと知らず

もう会えぬかもしれないと集まりぬ傘寿の会の盛況なこと

自転車で並び通ひし通学路懐かし友も今は白髪

夏目先生を偲ぶ

豊川 白井 信昭

たゆたゆと春の潮うしおの流れゐる橋二つ渡る潮入の浜

花壇にて三・二一甦もくとうる午後二時四十六分今し黙禱

未だなほ行方不明の人捜す警察官らテレビの映像

朝より冷たく吹き荒れ日もすがら夜のニュースに春一番と

静まりし『愛知こどもの国』麓なる広き駐車場かんこ鳥鳴く

年毎に賀状短歌頂きて夏目さん今いかにいますや

夏目さん会場に写真何枚も撮りてくれたり有難きかな

コロナ禍いたしかたの致方なき運命とこの写真綴折折に見む

盛長は建久二年それまでの引馬野改めここ御馬とする

三河なる七御堂の一つとて長泉寺あり五井山麓ふもと

蒲郡の長泉寺にて盛長の五輪塔知る初めてののこと

神様に捧げる

東京 矢崎 直人

東風吹かば鳴子天神道真公その名東西今日の今まで

五日市街道沿いのリサイクルショップに集うカミとヒト・モノ

材木の木々の香りの立つる道モノの行き交ふ五日市街道

小金井の特別支援学校の人らの散歩唄い出す人

てんてんと追ひて歩いてどんぐりの実の落つ巖島神社

春の雨箱根ヶ崎の踏切で一時停車の車の尽きず

神様に捧げる相撲連綿と和田乃神社に伝わる神事

錦華鳥キンカチヨウ探しています「名前はポー」貼り紙を見て空を見上げて

「桜橋」名前の由来書き残す土地の人らの喜び哀しみ

バス停の場所間違えて追いかけてとまってくれてやっと乗れたり

『いっとうよせ』

西浦公民館 いーはとぶ

菜の花をかかへて夫は帰り来ぬ部屋に甘き香みちみちあふる

山崎俊子

さわさわと雪降り出す庭ながむ猫と我とのものうきひるに

私の背に「だーれだ」と言ひすり寄り来おんぶをせがむ一年生ら

伊藤晴江

我が走りを男子児童がまねをするこの子らとともにほくそ笑みある

ブロッコリーの大きな葉っぱが大好きなヒヨドリらしきがけふも来てゐる

三田美奈子

ブロッコリーの葉っぱ啄む青い鳥春風吹く中渡りゆくとふ

失せ物の年々増えてうろうろと我が一日の半ば潰えて

水野絹子

こんなにも気重は歳のせいなるかあれよといふ間に我がオペ迫る

目覚めればまづ室温を確かめてエアコン始動は十度以下なり

牧原規恵

次々の故障に買い換え訪れるわが家の備品わが歳のごと

真夜中に目覚めてつける深夜便歌を聴きつつ又眠りつつ
雪の中交通整理する人に一礼をして家路へと私

稲吉友江

冬晴れの今日こそ窓辺の日向ぼこかつては義母も座はりぬしここに
長き首を前に後ろに海鷗かしら歩道を歩くまう飛べぬのか

鈴木美耶子

姪つ子の嬰兒誕生ラインにて映像届く晴れやかなる日

吉見幸子

支部展に参加すべしと二十三号刈谷へ向かふレリアの花と

コロナ禍に予定通りの手術とふ友がすすめる「足輕仁義」

牧原正枝

家中の電気灯してさあ始む「福はうち鬼は外」声は小さめに

コロナ禍の大波六波に揺さぶられ小舟のごとき吾らな沈みそ

森厚子

三度目のワクチン接種予約せむとれぬもとれるもデジャブと気づく

現代学生百人一首

東洋大学

夕焼けは光のパレット日によってあかね桃色今日は何色

茨城高等学校三年(茨城県)

藤^{ふじ}澤^{さわ} 怜^{れい}奈^な
18歳

ふと香る蚊取り線香脳裏にはあの穏やかな亡き祖父の笑み

江戸川学園取手中学校二年(茨城県)

塚^{つか}本^{もと} 愛^{あい}菜^な
13歳

とちおとめ氷の山を染める赤頭にキーンと打ち上げ花火

宇都宮海星女子学院中学校一年(茨城県)

デンプシーニコール春^{はる}香^か
12歳

化学基礎教えてくれる君の手に働いてほしい分子間力

高崎商科大学附属高等学校一年(栃木県)

野^の村^{むら} 百^{もも}花^か
16歳

電卓のマイナスボタン押したのにACボタンでやる気もAC

高崎商科大学附属高等学校二年(群馬県)

鈴木 木 彩 音 16歳

養蚕の「よ」の字も目立たぬ現代にひそかに聞こゆ桑をはむ音

埼玉県立川越総合高等学校二年

湯本 蓮 17歳

指ハート流行おくれ気にせずに貴方に届け私の気持ち

埼玉県立坂戸西高等学校二年

小林 千 華 16歳

画面越し毎日見てた担任がデカくてびびる初登校日

埼玉栄中学校一年(埼玉県)

藤原 史 奈 13歳

続「昭和こどもの四季」 童謡とマンガ・絵本など 高橋育郎

天気の良い日は外に出て わらべ歌で遊びます
雨や風の日 家にいて みんなで童謡うたいます

「カナリヤ」「七つの子」「証城寺の狸ばやし」「雀の学校」
「赤い靴」「あの町この町」

「赤ちゃんのお耳」「お山の大将」「スナヤマ」「からすの
赤ちゃん」「黄金虫」「てるてる坊主」「シャボン玉」「背

くらべ」「かたたき」「月の砂漠」「毬と殿様」
原っぱで 花摘みしての帰り道 みんなで歌った

「夕焼小焼」「靴が鳴る」

近所のおばさんに教えてもらった「アメフリ」
母さんに教えてもらった「どんぐりころころ」「雨降りお月」

「この道」

父さんに教えてもらった「一寸法師」

「めえめえこやぎ」は川田正子が歌って「めえめえのお姉さ
ん」と言われた。

「青い眼の人形」は、キューピーちゃん 「どんななみ
どんとときて

どんとかえる」女の子が踊ってる 男の子はみているよ
桃の節句は「うれしい ひなまつり」端午の節句は「こ

いのほり」

小学校の音楽の時間に歌った思い出の歌は 「ウミ」（いっ
てみたいだよそのくに）

「オウマ」「梅の花」「野菊」「朧月夜」「スキー」「海」「牧場
の朝」「冬景色」

なぜか戦時中は歌われなかった「故郷」と「赤とんぼ」
心のふるさと 懐かしい

あの頃 車は通らない たまに通るのは乗合自動車のバス
タクシーは円タクといていた それから人力車と馬車
馬車はトテ馬車。

荷車は馬がひき リヤカーは人がひき 自転車でも引いた
トラクはまだまだ少ないよ 戦時中は木炭が燃料だった
たまに走り抜けていく愛嬌者の小型自家用車は「ダット
サン」

町中を小走りで行く 小柄な女の先生 あだ名は「ダッ
トサン」

だからこどもは のびのび遊んでいた
こどもは風の子 元気に遊ぶ子供たち 大人は目を細め
てみていたよ

マンガと絵本が好きだった

マンガといえばミッキーマウスにベッティちゃん 力
自慢のポパイがいたよ

それから人気は「のらくろ」「タンクたんくろう」「冒険
だん吉」「フクちゃん」

そして しょうちゃん帽の「しょうちゃん」
戦後になって知ったのは「サザエさん」 テレビになっ
てますます人気

続いて復興のきざしが見えたころ「鉄腕アトム」が登

場し「アンパンマン」が飛だしてして こどもたちは大喜び

そのあと昭和の爛熟期には「ゲゲゲの鬼太郎」

そこで こわい妖怪は 鬼 天狗 一つ目小僧 ろくろ首 そして狐つき

度胸試しも怖かった

「天狗」と言えば 活動写真(映画)の「鞍馬天狗」それから「丹下左膳」忍術使いの「猿飛佐助」

エノケン・ロッパ「あのねおっさん」のたかせみのるさんごろう

アメリカのチャップリン お腹の底から笑ったよ

絵本は「二宮金次郎」薪を背負い本を読みながら歩いてたその姿 銅像になって

小学校の校庭に建てられた。けれど今はダメ ながら歩きはいけないよ

それから「乃木大将」と「生若丸」おもしろいのは「一休さん」

おとぎ話は「桃太郎」「金太郎」「カチカチ山」と「兎とかめ」「さるかに合戦」

そして「一寸法師」と「浦島太郎」それから「花さか爺さん」「こぶとり爺さん」

「舌切り雀」に「文福茶釜」「証城寺の狸ばやし」「おにぎりコロリン」

雑誌は「少年倶楽部」と「少女倶楽部」戦後は「野球少年」と「漫画少年」ほかに「少女」童謡歌手が豆スター(アイ

ドルとは言わない)として、華々しく紹介され、レコード童謡時代になった。

「かわいい さかなやさん」「赤い帽子 白い帽子」「おさる

の かごや」「なかよしこみち」「あのこは だあれ」「りんごのひとりごと」「せんだうさん」「たきび」

傑作小説の「怪傑黒頭巾」と「怪人二十面相」「ああ玉杯に花受けて」「善太と三平」

紙芝居は「少年王者」と「黄金バット」太鼓が鳴った 拍子木鳴った

むらがるこどもは、水あめなめた

こちらでもゲラゲラ笑った「弥次喜多道中記」神社のお神楽「おかめひよつとこ」

かわいそうで涙が出たのは「安寿と厨子王」先生が読んできた。

それから大長編は「南総里見八犬伝」先生が好きなところだけ読んでいた

「孫悟空」「アラビアンナイト」はマンガ映画にもなったよ それから「ピノキオ」

「ジャックと豆の木」「メーテルリンクの青い鳥」「ロビンソン・クルーソー」

アメリカの映画「ターザン」も みんなといっしょに見に行った それから「バンビ」

ラジオの連続放送劇は「鐘の鳴る丘」「向こう三軒両隣」

そして「サクラランボ大将」「赤胴鈴之助」 こどもはラジオに駆け寄った

「イソップ物語」「アンデルセン」「グリム童話」「トムソーヤの冒険」も、よく読まれたね。

昭和のこどもが夢中になったお楽しみの数々でした。

『俳句』

一礼の西町天神梅真白

矢崎直人

春の雲横断歩道のみんなの手
けん玉やゆびをくわえる春の雲

地の底の動く気配や今朝の春

植村公女

立春や王子稲荷の火伏せ風

友の死を友に伝ふる余寒かな

陸橋にリュックの少女夕霞

木村歩歩

野焼きして湿性花園の門開く

白杖の先に群れ咲く黄水仙

体育部と耐震工事の春休み

病院に爆撃音キーウの春

啓蟄や自粛生活三年目

まんさくや三月^{みつき}ぶりなる散髪へ

春月や京の華てふ米の酒

行く春を追ひかけている一万歩

祈りたき心に立ちぬ葱坊主

花びらに埋もれてゐたりひとりぼち

四段目の花も咲き初む仏の座

石段々初夏^{はつなつ}の空へ登りゆく

今 泉 如 雲

今 泉 由 利

『酔いの徒然』（一二二）

丸山 酔宵子

『映画、あれこれ思うこと・・・』

蔓延防止が延長されているが、映画ロードショー巡りは週2本から3本で年間120本ペースで、コロナ以前の例年並みのペースになってきた。

今年も大島新監督（大島渚監督の息子）の話題作、「なぜ君は総理大臣になれないのか」小川淳也衆議院議員選挙の激戦区を描いたドキュメンタリー「香川1区」を皮切りに、「スパイダーマン」、クリント・イーストウッドの「クライ・マッチョ」、「コーダ あいのうた」、「ウエストサイドストーリー」、「ナイル殺人事件」、「コンフィデンシャルJ.P.」、「ハウス・オブ・グッチ」、「フォレスト・ガンプ」（4Kリメイクバージョン）、「ナイトメア・アリー」等々、ハリウッドから邦画まで既に今年も30本。勿論その中には、「ドライブ・マイ・カー」も1月中にしっかり観ている。

昨今の映画館は環境設備が充実していて、椅子の座り心地、音響設備の素晴らしさ、それに何よりも換気設備機能の充実である。コロナ禍での対応は徹底していて、上映中に3回もの空気の入れ替えをしているそうだ。そ

れに加えて入場制限を設けているわけであるから、快適空間そのもので、映画への集中力がより高まる。

映画を見る際に、より集中して映画を楽しむため、自分なりのルールを決めて必ず実行していることがある。

- 一. 基本的には映画は一人で観ること
- 二. 昼食後の午後一番の上映映画を観ること
- 三. 観ながらの飲食はしないこと
- 四. 上映五分前にはトイレを済まして着席すること
- 五. エンドロールまでしっかり観ること
- 六. 鑑賞後どこかのバーか居酒屋で一杯ひっかけ、余韻に浸ること

まあ、くだらないといえなくはないのだが、映画は総合芸術、製作者の苦労や心意気をしっかり受け止めることが大切であると思う次第。

話題の「ドライブ・マイ・カー」は、「偶然と想像」でベルリン国際映画祭銀熊賞を受賞した濱口竜介監督。脚本により映画化され、国際映画祭でグランプリを軒並み獲得し、アカデミー作品賞、監督賞、脚本賞の呼び声も高い。日本映画で作品賞・脚本賞へのノミネートは今回が初めてであるが、監督賞では「砂の器」の勅使河原宏、「乱」の黒澤明に続き36年ぶりとのことである。

濱口竜介監督は黒沢清監督「スパイの妻」の脚本執筆に関わり、同作はヴェネツィア国際映画祭で銀獅子賞（監督賞）を受賞したのだが、第94回キネマ旬報脚本賞も受賞している。

ことほど左様に、映画における脚本は生命線で、巨匠小津安二郎も脚本作りに蓼科の別荘に籠り切り、七転八倒した姿を、エッセイなどに面白おかしく描いていた。黒澤明も、生き生きとした絵コンテなど実物を拝見したことがあるが、そこには将に、映画の迫力あるシーンが飛び出してきたようだ。

一連の黒澤明監督の痛快且つ迫力ある映画とは対照的に、濱口竜介監督「ドライブ・マイ・カー」は心のひだを淡々と描いて行くというフランス映画にあるようなタッチで描いている。あくまで個人的には、映画は総合芸術であるとともに、総合娯楽であるべきで、観終わって爽快感のある黒澤明的映画に軍配を挙げたくなるのである。

黒澤明作品と言えば、三船敏郎が欠かせないが、そのスクリーンでの存在感は圧倒的である。「羅生門」「7人の侍」「用心棒」「赤ひげ」などで黒澤明とともにその名が世界中に知れ渡ったり、世界中からオファーが舞い込み、「世界のミフネ！」と世界的なスターとして脚光を浴びたのである。

1966年初めてハリウッド映画「グラン・プリ」に

出演しイヴ・モンタンと共演を果たすが、その後「太平洋の地獄」では、リー・マーヴィンと、「レッド・サン」では、ハリウッド映画を代表するチャールス・ブロンソン、フランス映画のスターアラン・ドロンの世界3大スターとして共演、「太陽にかけの橋」では、彼の名優デヴィット・ニーブンとも共演していたのである。

現在でも、渡辺謙とか真田正之などハリウッドで活躍（？）しているスターがいるが、三船敏郎の画面からあふれ出るオーラには足元にも及ばない。アラン・ドロンのチャールス・ブロンソンと並んで画面に出てもなく引けを取らない迫力があるのだ。

あの、石原裕次郎でも、高倉健でも三船敏郎の前に立つと醸し出す臭いと汗とかそのビビッド感が違うのである。

黒澤明のエッセイが何かに、あの演技に厳しい黒澤監督が三船敏郎だけには一切演技指導をしなかったということが記されていた。三船敏郎と言う役者は、矢張り何かを持っていたのであろう。

春雷や傘の水切り映画観る

ビール飲む男黙って黒ラベル

春雨やロードショー観て空仰ぐ

酔宵子

楽しい時間 114

山本紀久雄

2022年3月31日

九代目市川團十郎・・・其の二十

前号の最後に「鉄舟は百俵二人扶持という軽輩でありながら、何故に將軍慶喜の御前に出頭し得たのか」と述べたが、その背景からお伝えしたい。

この当時、慶喜は上野寛永寺に謹慎・蟄居していた。身辺擁護は慶喜が信頼する槍の名人である高橋伊勢守（泥舟）である。江戸に向かっていた官軍が、駿府に入つたと報告受けた慶喜は、伊勢守に「伊勢、お前が駿府まで行き、予の恭順の実を朝廷に奏してくれ」と指示した。泥舟が慶喜の命を報じて引き下がり、出立の準備をしようとしていると、再び、慶喜が召し返した。

「伊勢がいなくなると麾下の侍たちが爆発するかもしれない。お前でないか、予の命を守ってくれる者もなく、幕臣たちを鎮定する者もおらない。お前に代わる者がいないか」

「恐れながら」と泥舟は述べる。「いま、麾下の士を見ますに、尊命を全うするべき者は、私の義弟、山岡鉄太郎以外おりませぬ。この者にお命じ願います」

「そうか、お前が言うのであるから間違いない。直ちに命を伝えて走らしめよ」

「ここで再び泥舟は「恐れながら」と応え、「この一大事は軽々しいものではございませぬ。かの者を御前に召して、御直々にお命じなさるべきかと存じます」

「わかった。山岡を呼べ」という経緯があつて、鉄舟は慶喜の御前に罷り出て直接指示を受けたのであるが、だが、今までの交渉

者に比し、あまりにも身分・格が低き鉄舟。ただ持ち得るのは剣・禪修行で鍛えぬいたこの身しかない。自分にできることは、自らの中に「決死の覚悟」を植えつけ、自分の「人間としての規範・矜持」に火をつけ、自らを追いつくことしかなかった。

西郷との会見・交渉でみせた「決死の気合と鋭い論鋒」は、このように生れたのである。駿府談判において鉄舟は、単なる剣術使いから、戦略性をもった交渉術を併せ持つ人間へと昇華させている。いわば人間完成への階段を二段上げ、テイクオフさせ、人間の枠を広げたのである。そして、その昇華筋道は「相手の立場を使い分ける」ことで、鉄舟の立場を、西郷の立場へと置き換える交渉術、これを談判過程で一瞬にして発揮させたのである。この「立場の入れ替え」が江戸無血開城を成立させた根本にあつた。

実は、九代目も鉄舟の駿府談判は熟知していた。これによつて明治維新時代が大過なく開いたことを理解していて、それが鉄舟の「立場の置き換え」にあつたことも把握していたのである。

九代目は明治27年（1894）日清戦争が勃発し、歌舞伎には壮士芝居という新しい相手が登場したことで、本来の役者の芸をはじめとする様式性を守り通す道を選択するに至り、見物客が求めてやまない「旧来の芝居」がもつ江戸的な趣向の内に、「二種の趣味」があるということについて再認識したが、その前提として歌舞伎芝居には「見物客」が最も大事であるという基本前提、そこに改めて気づいたのである。

それまで見物客を説得しようともがいていたのである。だが、そうではなく見物客は何を求めているのか、基本的立場に戻つて再確認し、そこへ転換したのである。

これは芸の基本が完成している九代目にとって困難な課題ではない。「旧来の芝居」がもつ江戸的な趣向の内に、「二種の趣味」があることは熟知している。今までは、これを知りつつも「当時の

演劇で仕て居るのは皆嘘だ」という思い込みから脱却できず、突っ走ってきた。見物客という相手が希望していることを無視し、こちらが舞台で展開する「活歴もの」こそが、「故実を正して」舞台面に「真実」を出現させるものだとし、舞台上の虚構性の排除による「事実」追求をしてきた。

だが、演技者としての自分を、見物客に置き換えてみると、あまりにも「今までの芝居において見ることがなかった新式」であったため、「事実」として受けとめるどころか、「絶対否認」という拒否反応を示されたわけである。今までの歌舞伎世界とかけ離れていたという事実により、よく気づいたのである。「立場の入れ替え」を行うことで、ようやく今までは「うそ」という「不自然なる」ものを「種の趣味」として再発見するに至ったのである。

気づきは簡単である。しかし、思い込んでいる身では「気づきはない」。ところが立場を転換することを「気づけ」ば、そこに新たな世界が広がり、見物客から受け入れられるという結果となり、「九代目の芸」もまた結実のときを迎えていくことになる。

九代目は、死の半年前にあたる明治36年（1903）3月、歌舞伎座で『清正誠忠録』に出勤する。弟子である七世松本幸四郎は『二世代』（右文社 昭和23年）で、師匠団十郎が勤めた加藤清正が言い放つ「ああ、夢か」という台詞に、「詠嘆調の感情が盛り込まれて」いたと、以下のように高く評価している。

『清正誠忠録』の夢の場で清正が夢



から醒めたとき、「さては今のは、夢であつたか」と七七で書かれてあつた台詞を、師匠は、「ああ、夢であつたか」といつたのですが、その次の上演のときには、ただ、「ああ、夢か」と直してしまいましたが、それにはもちろん詠嘆調の感情が盛り込まれますので、いかに夢から醒めてほつとしたという気持が表現されるのです」

清正が「夢から醒めたとき」の台詞は、まず舞台面において、清正が豊臣秀頼に別れを告げるという夢のなかの出来事がくり広げられ、いったん暗転となった後に清正がうたた寝をしている場面へと変わり、そのうたた寝から醒めた際に発せられる。それだけにこの台詞は、夢の場と夢から醒めた場という舞台面の状況転換を示すきっかけとして、他の台詞以上に際立たせていかねばならない。そこで団十郎は、あえて七五調の定型を排し、この台詞に「夢から醒めてほつとしたという気持」を込めることで、より明確に状況の転換を見物客に示そうと試みたものと指摘できる。そのために九代目は見物客にとつて馴染み深く、かつ「流暢に聞えて耳には聞きたい」ものである「七五調」の巧みな調子を「時的に取り除くことで、瞬時に見物客の注目を集め、清正の台詞に込めた「夢から醒めてほつとした気持」を伝えようと努めたものと指摘できる。その結果「さては今のは、夢であつたか」という清正の台詞は、「ああ、夢か」にまで短縮されたのである。

このように九代目は新たな国民国家としての明治時代において、生涯を傾けた「演劇改良」を通じ、「団十郎」の芸を確立し、「明治歌舞伎」へと見事に転生をなしたとげたのである。

だが、歌舞伎界及びこれに関連する専門家でも、この九代目が到達した境地の背景に、鉄舟との邂逅によつて「立場の入れ替え」を体得したことを知る人は少ない。

長いこと連載を続けてきたが、次号をもつて九代目市川団十郎を終えたい。

絹の話 (137)

「アトリエテレビ」 今 泉 雅 勝

織物を作らなかった人々と暮らす(2)

トンガ王国

今から50年以上前、1970に年原始の「美」を求めて南太平洋のポリネシアのトンガ王国を旅した時の話です。

トンガ王国はオーストラリア北東に位置し、北半球で言えば台湾位の緯度に位置する国です。北東のハワイやタヒチと遙かに離れた南西のトンガでも互いに言葉が通じるのにびっくりしました。こんなにも広い太平洋の島々に何時どうして人々が渡つて来たのでしょうか。

中国の漢族が膨張し始めた紀元前2,000頃にアジアからボートピープルとなつて島々に渡つて行き、氷河期に渡つた先住のアポロジニなどと混血を繰り返して、紀元前500頃にポリネシア人となつて南太平洋の島々に広がつて行つたと言われています。

クジラの肉の分配

フィジーから空路トンガタップ島に着き首都ヌクアロハの宿に行く途中、狭い「」字型をした湾内の砂利浜にクジラが横たわっていて、多くの人がガヤガヤとクジラ

に群がって、指図人の指示に従つてクジラの肉を大きな蜜刀様な包丁で切り取っていました。5kgはあるうかと思われる肉を何も包まず、青々とした椰子の葉で編んだ大きな籠に無造作に入れて、嬉々として持ち帰るなんとも和やかな様子がカルチャーショックを受けました。

タロイモとヤムイモ

宿の朝ごはんの主食はタロイモかヤムイモ(タピオカ)で、どちらにするか毎朝聞きに来ます。タロイモは日本のヤツガシラと同じ感じですが、毎日食べていると胸焼けがしてきます。ところがヤムイモはやや水っぽくて腹持ちはよくないのですが何日経けても食べても胃の負担は軽く快適でした。

出戻りの弟

宿の主人は女性で、弟が細々とした生活の雑事を手伝っています。聴くと弟は婚家から離縁されて出戻つて来たそうで、トンガでは財産継承は女性にあつて母権制社会構造を色濃く残しているのに驚きました。

トンガの正装

トンガでは役所に出勤する時は勿論、一般の外出時も男女を問わず背広とネクタイ、Tシャツ姿でも腰にタパ(樹皮布)又はバンドヌスやヤシの葉でめいめい編んだ

腰飾りを付ける事がオフィシャル的習慣です。

大きなタパ布を闘牛士よろしく巻いている男性もあれば相撲の下がりの様なシンプルな人もいます。女性は芸術品と見紛うほどにデザインに凝ったものを付けている人もいて、王宮前の広場などでは行き交う人の腰を見ているだけで実に楽しいものがありました。

ただ色はみな天然の無着色ですので実に爽やかです。

万戸タパを打つの音

朝が白々明ける頃になると各家々から「トントン」とリズムカルな乾いた木槌の音がまるで合奏をしている様に響きわたって、朝の目覚めを実に気持ち良いものにしてくれます。これは前日カジの木（桑科）の樹皮を剥いだ幅10cm大のものを木槌で叩き、A3大くらいの手漉きの和紙の様に薄く延ばす朝飯前の女性の作業でした。

タパ作り

昨今タパ作りはポリネシアの中でもサモア、フィジー、トンガで見られますが、特にトンガは盛んです。朝食後小さなものは個人で作りますが、大きなものは共同作業で制作します。持ち寄った延ばされた樹皮布の繊維の方向を横方向に統一して並べ、タロ芋のペーストを塗りその上に繊維の縦方向の樹皮布を貼り付け、3枚をベニア板の様に薄くて強度のあるものにします。

サモアのタパの柄は手書きが中心ですが、トンガは拓本形式で、大きな物を作る時は使われなくなった丸木舟の底に彫刻を施し、マホガニ色の樹液を塗り、大きく貼り合わされた樹皮布（2×3m）を大勢で一気にかぶせ拓本をとる様にプリントします。

トンガの田舎の民家

首都のヌクアロハを出ると、のんびりした田園風景の中に屋根から壁まで草木作りの楕円形の民家に出会います。民家には窓がなく入り口は非常に低く小さいので身をかがめなければ入る事はできません。

英国がトンガを保護国にした時、英国人が入り口で“too low, too low”といったというので、今日「トウロウ」はトンガ語で「こんなにちは」という意味になっています。家の中では草木の壁からの隙間風を防ぐために大きなタパクロスが壁に貼ってあり敷物にもなっています。なかなか趣のある風情です。

王様がタパクロスを下賜する

国の祝賀の時王様は大きく立派なタパクロスを功労者に下賜するのが慣わしだそうです。トンガでタパはお金に代わる一種の財産であり、生活の色々な場面にも使われる便利な資材です。ポリネシアでは織物が発達しなかった地球上でも稀有な地域です。

本田カイロプラクティック先生の春夏秋冬

本田のひとり言

<https://hondachiro.exblog.jp/>

2022年4月6日

自分の時間を大切に

今週は新たなスタートが始まる方も

多くいらっしゃると思います

環境が変わる ということとは

自分自身が思うより大きなストレスがかかります

仕事や職場さらに住居が変わるといえば想像以上です

無意識に100%を超えていたりします

そこでガクッと来るのが6月

梅雨などの気圧の変化も加わり

気がつけば心も身体も大きく崩してたりします

そうならないように

3S+ゆたぼん

1日2〜3回の食後のヨーグルト

仕事や学校と関係のない楽しみ

そして

肩の力を抜いて力まず行きましょつ

中々難しいですけどね

今日も笑いながら行きましょつ

2022年4月13日

寒暖差と気圧

気圧に負けない準備もしていきましょ
う
今日も笑いながら行きましょ

日中は半袖で丁度良い暑さです

朝晩の涼しい風がホッとします

明日は季節外れの気温の高さから

平年通りの気温に戻るらしいのですが

ここ数日の気温との寒暖差に寒く感じそうです

そこで

今日までの暑さは忘れて

寒く感じない様に服装や寝具に十分気をつけて下さい

水分量も引き続き多めにし

温かい飲料の摂取をお勧めします

ゆたぼん で就寝時 腸を温め

乳酸菌を引き続き1日 2〜3回食後に摂取し

スマホを30分以上続けて見ないようにし

「江上浩二の独り言」 53 江上浩二

ノン・コグニティブ・スキル 非認知能力

日本語を理解する際に一番厄介なことは先人が所謂英語の発音をカタカナで表記したカタカナ外来語である。その理由は先人がそもそも適当な和訳漢字を見出せなくて、発音をそのまま表記したことで、難しさも醸し出しながら、本来の意味はと知りたい一般人を惑わせている。

さて、以前プラズマという言葉について呟いた際の宿題として自らが自らに課した事 (non-cognitive skill / ノン・コグニティブスキルの本意) に少し立ち入る。発端はノーベル賞受賞経済学者 (James J. Heckman / ジェームズ・ジョセフ・ヘックマン) が所謂学力、IQ 値を英語では cognitive ability と言い、それに対して non-cognitive skill が子供たちの小さい時から育つ環境によって大きく異なり、大人になって豊かな生活 (精神的にも経済的にも) を送れることを左右すると指摘した。そのジェームズ・ヘックマンは学力・IQ 値を全否定したものではないが、翻訳の世界・業界が英語から日本語へその論理展開される際に、私が疑問に思ったことがあって、non-cognitive skill が非認知能力と和訳され、

認知症の認知と混乱したことであつた。その原英文では confidence and perseverance (自信や根気強さ) のようなこととされている。

付け加えると我々日本人がいつ頃から認知という語句を使い出したのか定かでないが、私の短い経歴では痴呆症を認知症と言い換えた比較的近くの出来事；平成十六年厚生労働省の痴呆を差別的でない用語で置き換える検討会が開かれ、最終的に認知症とした。

痴呆 から 認知症 認知障害 用語変更検討 平成十六年 厚生労働省

<https://www.mhlw.go.jp/shingi/2004/12/s1224-17.html>

もう少し詳しい経緯を調べたのだが、非認知能力とは学力・IQ 値を否定した意味ではなく、感情や情緒など精神的な範囲のことをいい、ジェームズ・ヘックマンが指摘してから、文科省の研究課題に取り上げられ著名な大学の先生方で検討された報告書 (2017年) まで目を通させて頂いた。その報告書では non-cognitive skill を情緒的強みと言い換えている。さらに、最近の大手新聞のコラム記事「2022年一月十三日読売新聞朝刊 p 十一 ニュースの門、memo より」では、次のように「一学級の児童数が減った教育現場は、」学力のほ

か、意欲や根気強さ、協調性といった非認知能力に對してどのような効果があるのかという課題が提起され、児童数が減ったクラスが即、非認知能力の育成に繋がるのか？という疑問が紹介されていた。

実は私がこの独り言をまとめるに際して一番時間を割いたのが、心理学者アンジェラリーダックワースさん(Angela Lee Duckworth)の2013年TEDトーク(YouTubeで検索出来ます)で、子供の教育現場での観察・研究が進められ、子供が成し遂げた成功・成果は学力・IQ値に関係なくGRIITなどの示したことである。

本寄稿を準備していた際に起きてしまった、もっと痛ましいのは令和四年一月十五日の大学受験の第一ステップの共通テストの早朝に中部地域から都心へ移動し、某著名大学の入り口付近で受験生と老人に傷害を与え、近隣の駅での放火や在籍学校について騒がしたりした事件を起こした受験前の高2の生徒の non-cognitive skill の醸成は忘れられ、周囲も cognitive ability のみを求め、それだけに答えようとして無理をしていた高2の子供の心を爆発させたのでしょうか。また、関西の女子大生が関東圏の著名私立大に再入学したいという意欲的な意思を持ちながら、同十五日の共通テストでスマホとSNS

を使い、試験場外の第三者を通じて所謂カンニングを行い、メディアではそのスマホを使ったカンニング方法の詳細は？と賑わせたが、その女子大生が自首して、犯人は誰かという事の決着は得た。しかし、医者になりたいたという高2の子供と十九才の女子大生の心情、なぜそこまでの行動に追い込んでしまったのかという議論はメディアではされずに、新型コロナウイルスの第6波の感染者急増にテーマを替えてしまった。

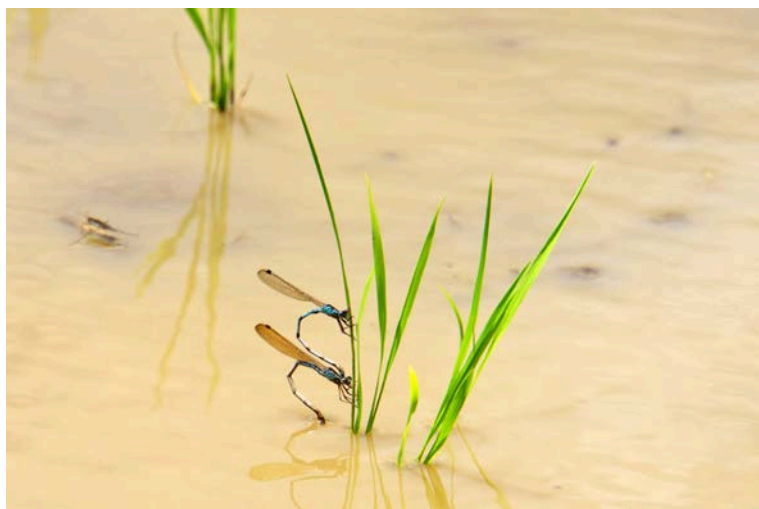
アンジェラさんの2013年TEDスピーチでは non-cognitive skill とどう英語は使われていないが、成功への鍵は Grit (Grit is passion and perseverance for very long-term goals) であるとお話したが、非認知能力も非常に時間のかかる目標を達成するための情熱と根気強さと同じことです。そもそも Grit なる英語の意味は？で、アンジェラさんは再定義し、Guts (度胸)・・・困難なことに立ち向かう能力、Resilience (復元力)・・・失敗しても諦めずに続ける力、Initiative (自発性)・・・自分で目標を見つける力、Tenacity (執念)・・・最後までやり遂げる力の頭文字を取ったものです。GRIT という言葉が広まって、和訳されて「グリット」という外来語になって皆さんに変に表面的だけの意味を受け入れて欲しくないというのが私の願いです。



初狩便り
(6)



花
野
み
ぷ
り



田植え

本格的な夏に近づきつつある太陽の下、育苗箱に入った稲の苗が畦に運びこまれる。「早苗」とか「玉苗」という美称通り、青々として美しい苗である。

田植えも機械化が進み、田植機の背中に苗を背負うように設置して植え付けていく。機械植えの田の脇に、「笑顔の田んぼ」と呼ばれる二枚の交流田がある。ここは手植えで苗を植え、稲刈りも手でする。田植えの日には、老若男女の三十名ほどが集い、苗を手にして、ぬるっとした田に足を入れる。苗は三本ずつを土に植え付けていく。苗の成長にあわせた田草取りなどの作業をやりやすくするため、横に紐を張って一列で植え進む。普段、こんな姿勢で仕事をしたことはなく、翌日には決まって何人もが筋肉痛となる。

かつて田植えが村の共同作業だったころ、田植え作業をする「早乙女」さんは、私たちの五十倍の速さで苗を植えたものだとか、新潟の米農家の三男は笑いながら言う。田に植えられた苗は、細く弱々しく美しく、たまらなく愛おしい。

『隠蔽』

中屋保之

洋の東西、男女の別を問わず、自分にとって不都合なことを隠したがるのは常である。すべてを曝^{さら}けだすことが必ずしも最善・最良とはいえないが、人類の根幹に関する事柄であれば、それは別物と考えるべきである。近年様々なところで『隠蔽』がまかり通っている気がしてならない。

隣国、中国で一九八九年六月に起きた「天安門事件」や、チベット、新疆ウイグル地区での人権弾圧、また、現在進行中であるロシアのウクライナへの主権侵害などにみられる国家権力による『隠蔽』がこの代表例であろう。

我が国に於いても、数代前の総理大臣が数多くの拙い隠蔽を指弾された。また、最近の報道によると金融商品取引法違反（相場操縦）罪で、大手証券社の幹部が起訴されたそうであるが、隠蔽はなかった！と言い切れるものかどうか。各々言い分はあろうが、誠に情けない限りである。天網恢恢疎にして漏らさずの諺どおり、いずれは白日の下に晒されることになる、と信じたい。

『隠蔽』の背景には必ずと言っていいほど「国のため」「組織のため」が存在する。本当に「〇〇のため」だけだろうか。本音でいえば、「自分のため」だろうと思える。習近平国家主席もブーチン大統領も、「国家主席」「大統領」という権威・権力にしがみついている老人にしか見えない。事の大小にかかわらず、老害の顕著な組織の傾向に権力維持のための『隠蔽』工作を多く目にする。長期権力下に起こりがちな弊害といえよう。遺憾ながらこの二人、更なる権力維持を目指しているようである。

他者の言うことに耳を傾けられなくなるのも老害のひとつだとするならば、何をかいわんやである。この場合の「老」害とは、単なる年齢のことだけではなく思考的硬直性の程度と考えてもよい。それ故に、制度の歪み、矛盾が

顕著化し、それ故に『隠蔽』を画策せざるを得なくなる。そして、『隠蔽』が露見することを恐れるがために一方的なプロパガンダを発せざるを得なくなる、まさに負のスパイラルである。国家から個人に到るまで、負のスパイラルに陥らないためには、常に適正な新陳代謝が必要ということであろう。残念ながら、その兆候はまだ見当たらない。第二次世界大戦後に、大規模な武力を背景にした領土的野心をあからさまに発揮している大国は、ロシアと中国をおいて他にはない、という現実直面している。厄介なのは、今まで以上にそれを大上段に構えている「大統領」と「国家主席」がロシアと中国の権力掌握者であるということである。

安政六（一八五九）年、ロシア・シベリア総督のムラヴィヨフは、清国から黒竜江^{アムル}一帯の割譲をせしめることに成功し、その余勢をかって「黒竜江一帯からは海峡ひとつの距離にある」というだけの理由で樺太の領有を恫喝してきた。このところのクリミア半島併合やウクライナ侵攻によく似てはいまいか。中国の尖閣諸島に対する領有権の主張も根底には中華思想という一種の覇権主義的な様相を呈しているように思えてならない。

かと言って、我が国の一部の政治家、思想人の「憲法改正」や「自衛隊の装備拡充」論への安易な同調は控えるべきと思う。この先、『隠蔽』することなく慎重な議論の展開を望みたい。

魯國の武力侵攻を憤る

横山精真

不意の弾丸 婦童を哭かしめ

戦車蹂躪して 和風を裂く

更に兇るるは愚策の 侵略を滞らせ

猿の星を作さんと欲す 狂魯公

憤魯國武力侵攻

令和四年四月一日

不意弾丸哭婦童 戦車蹂躪裂寒風

更兇愚策滞侵略 欲作猿星狂魯公

（語釈）○魯国：ロシア。今は露国と表記するが、江戸時代に表記した魯は愚か者の意味があり明治になって訂正されたもの。この度は敢えて「魯」を使用する。○和風：のどかな風。○猿星：映画「猿の惑星」より。○狂魯公：狂った愚かなプーチン大統領。

※ロシアは一方的な侵略戦争を起こした。未だ雪の中とは言え、おだやかな街並みは一変し、女性や老人はただ逃げ場を失い悲しみの涙を流すのみ。幼児は父親をぶって行っちゃダメだと泣き、或いは独り投げやりの涙を流しながら避難の道を歩いている。母親に抱かれて状況を知らない幼児が天使のような笑みを浮かべているのを見ると逆に涙が誘われる。

「嘆」「魯」「愚」「兇」「狂」を乱用したい。現在までの報道を見て、今時の出来事かと疑うに始まり、唯々ウクライナの人々が可哀想でならない。米国のバイデン大統領は経済的締め付けと武器供与のみで兵を動かさない。成り行きはお見通しなのであるか？言えることの一つは戦いがエスカレートして第三次世界大戦の恐れが生じることである。それに乗じて兵力にものを言わせ侵略するとは、事実こんな事が起ったのである。

一旦事が起こって頭を過ぎったのは映画「猿の惑星」だった。「バカ共が遂にやったのか！」自由の女神が海に横たわるのを見て主人公が全てを理解したラストシーンである。核戦争をどんな風に物語ったら良いのか解らないだろう。有り得ないストーリーを追いつながら、最後は空しくも深く考えさせられた印象が残る。

歴史は戦争と疫病を繰り返している。戦争はより有利な兵器を作り、使って優位に立とうとしエスカレートするのは当たり前である。戦争に理性や法などはない。核を使用しないまでも戦争の犠牲者は悲惨だ。ましてや核に手を付けたら！

プーチンのはっきりと核使用も辞さないと明言している。核絶対反対！その前に戦争反対！戦争はイケないのである。最も難しい問題である。神様どう仕様もないことなのでしょうか？

郊行

今泉由利

東郊とうこうの雲際くもぎは好風こうふうは吹ふき

漾々ようようと櫻花おうか枝紅えだくれないに満みつ

慈悦じえつ幽夢ゆうむ前度ぜんどの路みち

望中ぼうちゆう心受しんじゅ天涯てんがいに在あり

東郊雲際好風吹

漾漾櫻花紅滿枝

慈悦幽夢前度路

望中心受在天涯

語釈

漾漾 〓 水にただよい流れる

慈悦 〓 いつくしみよろこぶ

幽夢 〓 かすかなるゆめ

心受 〓 願わくば

通釈

春の風に吹かれ、桜花をいつくしみつつ

どこまでもどこまでも…

願わくば天涯に至るまで…

康鍼治療院 (www.yasuhari.com)

玄 翁

「目と肝と血」

肝は血を蔵する臓器

血の出し入れ、貯蔵によって
あらゆる「動き」を養うぞ

「動き」は覚醒、起きての「動き」

朝日と陽気に刺激され

血がめぐりて動き出す

血の動きで肝動き、

肝が動けば、目が覚めて、

起きて動いて、覚醒じゃ

肝血目の精養うぞ

目に血届いて、モノを見る

朝陽に目が覚め、起きるのも

肝血めぐりて目が開く

寝るまで肝が目を開く

読んだり、見たり、集中したり
すべては肝の働きなり

今どき見るもの多すぎて、

目の疲れから、肝が病む

血の消耗・負担から、

血圧・動悸・不眠・多夢

月経・不妊・更年期、すべて肝の不調なり

寝るときや、血は肝臓に

戻りて目が閉じ、おやすみじゃ

寝る前、モノ見て目の酷使、

肝血臓器に戻られぬ

戻らぬ血は、寝るのを邪魔し

多く夢見て休まらず、力んで齒軋りカチカチじゃ

夜は見るのを控えるべし、

寝る前、目を閉じ温めよ

目の気・肝の気・血の働き、

目を温めると回復す

そしたら、肝もおやすみ

じゃ

肝休まれば元気が戻る

翌朝スッキリ爽快じゃ



「悲しみの本」

肺は呼吸の臓器なり

呼吸は外の気取り入れて、内の気だして交流す
外気と交流、肺のお役目、外を感じて、交流す

肺は悲しむ臓器なり

悲しみ肺に影響し、息の減弱、気が落ちて、
気持ちも縮んで、息止まる

悲しめば（悲しみゃ）気が消え、息つまる

人との交流、相手の気

発して感じて、心が動く

心の動きが、人満たす

ホッとし、喜び、笑顔になれば、

緩みて、悲しみ癒される

交流していた相手の気

あるはずのモノがなくなると

寂しさ、虚しさやってくる

人との交流途絶えれば、

悲しみ湧き出て、気が消える

交流していた相手の気

去ってなくなることもある
尽きてなくなることもある
奪われなくなることもある
人生移ろい、変化する

悲しみゃ気持ちいが外向かず、
内省、内観、内向きに、
時間を過ごす時となる
新たな自分を見つける時
新たな気の満ち探す時
悲しさ、寂しさ乗り越えて
新たな道が見つかれば
新たな未来が待っている
悲しみ、人を強くする



「氷魚」のことから(50) 岡本八千代

母屋より私の書屋、六畳一間にこもろうとする。東の窓の辺、西の出入り口以外は全部書物に囲まれている。そのまん中にある小さい炬燵の机にかしこまる。

やっとひとりだけの自分にかえる。やはり、東の窓を見上げる。そこには今日の午後のどんよりした曇りの空が広がっている…。

冬から春になろうとするこれが灰ねずみ色の空か。しかしそこにもうすい雲がいる。形があるようでないような雲が…。和雅院様(御津磯夫先生の奥様の法名)の「雲のかげ」の中の歌を想い出します。

○西に東に軒の風鈴の短冊のなびきつつ雲のかげの流るる

「雲のかげ」二十一首一連の中の一首です。和雅院様となられた絶筆の歌です。命果つるまで美を求め、流れてゆく雲の、そのかげを発見して歌われた抒情の歌と思ひ出すのです。

正岡子規も、「雲」、「雲の日記」などという小題をつけた随筆を書いたりしています。もちろん、短歌や俳句にも歌われていますが、俳句の方が多くうたわれているように思います。例えば、「寒山落木」の中には、

「雲一つこよひの空の大事なり」(明治二六・秋)

「雪雲の空にただよふ裾野哉」(冬)

「水仙にさはらぬ雲の高さ哉」(病起始めて門を出づ)

「曇りはてず又夕ばえに春の雲」(根岸草庵)

「雲無心南山の下畑打つ」(寓居)

「砂の如き雲流れ行く朝の秋」(寓居)

がありましたので拾いました。

子規全集十二卷(講談社)随筆の「雲」には、

「日本語にいていふ雲の名は白雲、黒雲、青雲、天雲、天つ雲、雨雲、風雲、日和雲、早雲、八雲、八重雲、浮雲、あだ雲、山雲、八重山雲、薄雲、横雲、むら雲、一むら雲、ちぎれ雲、朝雲、夕雲、夕焼雲、夏雲、皐月雲、さみだれ雲、夕立雲、時雨雲、雪雲、鰯雲、豊旗雲、はたて雲、猪子雲、ありなし雲、水まさ雲、水取雲、等猶あるべし。山かつらは明方の横雲をいふ。曾根太郎、阿波太郎などいへるは雲の峰をいへる地方の名なるか。これころみに綿雲、しき浪雲、苗代雲、などいふ名をつく。猶外に名つけたき雲多し。」と子規は言っています。

歌よみは、これらの名の雲のほか、自分自身の雲の発見、その名をつけた歌を創りだしたいものです。

また、子規は、「月夜、雲を見る。月の位置と雲の形状と相待つて奇を尽し変を極む。薄雲、月を過ぐ、白紗、玉を包むが如し、雲、嵯峨として、月、上に在り、朽根、玉を載するが如し。雲、長く斜にして、月一端に在り、雙龍、玉を争ふが如し。黒雲一塊、頭あり、脚あり、漸く大にして、半ば月を呑む、怪鬼の玉を盗むが如し。」と月と雲の変化を観て感じたことをまとめています。ここにも観る人の心の動きがあります。

寺田寅彦は「かりに空に雲というものがなかった場合を想像してみますと、物質的な問題は別として、ただわれの感じだけについて言っても、これはずいぶん単調な退屈なものであらうと思います。」：「空の厚み、深み」「いろんな形の雲」「いろんな色」「それが現われたり、隠れたり」と、雲の変化を示すことへの感動を人の心につくらせてくれるものととらえています。

いずれにしましても、人の心の変化との関係があるように思えるのです。

「氷魚」のことから (51) 岡本八千代

私の名付けた和雅院椿が、くれない濃くお猪口の形に咲き出した。今年は蕾も少ない。咲き出した一輪を、一輪挿しにさして炬燵の机の上に置いた。そして私はここにひとり――。子規の「松蘿玉液」を読もうとしています。

子規の随筆で、晩年の比較的長篇の随筆では、「松蘿玉液」と、「墨汁一滴」と、「病床六尺」と「仰臥漫録」とがありますが、そのうち、「松蘿玉液」という題名が、子規のどういうことから生じたのか、わかりませんでした。

先ず、松村明監修の「大辞泉」(小学館)で調べてみましたら、
○松蘿①(しょうら)サルオガセの漢名。

②松の木に絡まる蔓。

男女の契りの固いことのたとえに用いる。

○玉液①美しい液体。茶や酒の美称。

と書いてありました。私は、春の雨が、庭松の上に降った後、松を高く見上げて、その松葉の針の先にたまった雫が白く光っているのを発見して、このことを子規は言っているのだろうか、と思ったものです。その雫は丸く光りながら落ちる風情は、実に美しかったのですから。まるで、小さい粒々の光のイルミネーションかと思いを巡らしたものでした。

「松蘿玉液」は、明治二十九年四月二十一日から同年十二月三十一日まで三十二回にわたって、「升」の署名をもって新聞「日本」に断続的に掲載された随筆です。

随筆の終わりに「松蘿玉液子を祭る」とありますので、最初、

私がとらえた、松の針の白く光る美しい液などとはあまりにちがうらしき驚きました。ぬき書きします。

「陳玄子松蘿玉液と号す。清国徽州の産、其年齢を知らず。或は言ふ子の海を渡つて日本に来るや漂泊して南海の浜に到る、是れ今を距る殆ど三十余年前の事なりと。吾昨年秋郷に帰りて癪を養ふ。偶々子と相見る。子軀幹長大尋常に異なり。乃ち喜で携へ帰る。――略。終日無聊に堪へず――子と相親しむ。――略。花晨月夕興到れば則ち子を勞し風曉雨夜心平ならざれば則ち子を勞す。子粉骨碎身敢て勞を言はず。――略。一たび子が顔を見れば即ち文思流溢詩興勃然止まる所を知らず。吾の子が力を藉る甚だ多し。今や匣を開いて復た子を見ず。追懷の情に堪へず。弔するに俳句一首を以てす。詩百篇君去つて歳行かんとす。」とありました。

まさしくこの文章からは、まるで松蘿玉液子という人のことではありませんか。ますますわからなくなつてしまひました。

そんなにも子規と玉液子とは親しかったのか、そんなにも「子を得てより春恋の情已むを能はず」だったのかと、子規の心をミステリックにさへ思つたのでした。

ところが、この子規全集十一巻随筆一の解題を読みましたら、「陳玄」は墨の異名で、子規愛用の墨を擬人化して、「陳玄子」に対する感謝追懷の情を述べて、この「松蘿玉液」の一編を結んだものでありました。解題は、蒲池文雄という人が書かれたのです。

編集室だより【二〇二三年三月】

今泉 由利

○自分の「物」を持って、次の「住所」へ移るということが、引越だと思っていた。

私には、自分の会社と、関係している会社があり、その会社を連れてゆくのが、今回の引越しだから、一人の判断で、出来ることではない故、会計事務所に助けを求め、対応していただかなくては、成立しないことと知る。

じつとしてあれば良かった！と思うも、あとの祭り。荷造りがはじまってしまつてから、今、必要な書類が、どこに行ってしまったのか！「この『判』じゃない」「何処にあったかなー。」もたもたすることが次々…。でも次女由野がいたから…彼女は、力持ちで、記憶力にだけ、私の困りごととは、「そこにあるよ！」「集めておいたから！」

何とありがたり子に育っていてくれたことだろう。世界で、ちゃんと仕事をしてきたことを、目の当たりにしたのだった。

これから先、一人で、自分の範囲で、生きてゆかれるよう、身も心も頭も、鍛えなくては！

○私の一番はじめの引越しは、父と母の子供達が東京で勉強をする家を、父母が建てて下さつてあったから、その家へ行くために、東海道線に一人乗り「三保の松原」を車窓に

ながめ、「田子の浦ゆ　うち出てみれば真白にそ　富士の高嶺に　雪は降りける」万葉集の和歌を一人で眺めた。感動。

○二回目の引越しは、学生生活を終え、無謀にも、未知の国で、自分の力で生きてゆく、という目標をたてていた。四十五日間の船旅をして、日本から一番遠い国、アルゼンチンに出掛けて行ったこと。

船の中で、今、行こうとしている国は、何語を話しているのかな？人間が住んでいるのだから。何とかなるだろう。ほんの少しも心配にならないまま、太陽と月と星々と、とつともなく大きな海。ゆうゆうと船に乗っていた。

四十五日目に着いたアルゼンチン国。びっくりした。引越し荷物を、どこへ運ぶのか、その判断は、していなかった。船から降ろされたままの荷物の横で、雨が降ってきて、寒くて一言葉もわからないまま。こんなことつてあるんだ、との思考のまま、ブエノス・アイレスの、市中の十階建のビルの十階に住めることになって、やっと、無法なことをしていることに気がついた。

○十階の部屋に閉じ込めり、絵を描いたり、スペイン語の本を広げたり…。建物の外に出た日、アルゼンチン赤十字のトップ、画廊をもつ…背高くて、高貴なセリーナさんと出逢った。以心伝心、そのまま母親、娘、みたいな心が出来上ってしまった。

○セリーナさんに出逢え、彼女の保護のもと、アルゼンチンでの生活をはじめることが出来て、彼女の生活に、持ち上げて下さったのだった。

○日本の豊川の父母の、三河アララギ会に、外国で生きて出来た短歌を、随筆を、毎月のメ切り日に間に合わせる努力は、アルゼンチンのフェデックスから、日本の名古屋のフェデックスに着き、フェデックス社の車が「私の封書だけを、運んで来て下さるのだ」と父が知らせてきた。私の毎月々のアルゼンチンでの原稿を、太いなる田舎までお届け下さった、フェデックス様、ありがとうございます。

○外国で生まれた私の子供達が、日本の人と同じ日本語を話せるようになるために、アルゼンチンの小学校を卒業した日に、日本に向けて引越しをした。

日本の中学校に入れようと思ったのだが「前例が無いから、受け入れられない」と断られた。仕方がないから、日本在の、インターナショナル・スクールに在学し、中学校を終えた子達に、今度は英語が困らないように：：カリフォルニアに引越しをした。

子供達の学校へ送り迎えのために、ドライバースクールの先生が、家に練習車を横付けして、私を運転席に座らせると、そのまま一般道路で：：二回目のレッスンは、フリーウェイに乗るように。カリフォルニアに来たのだから仕方がない：：とは思うけれど。子供達の三年間の学校送迎はし

たけれど：：もうハイウェイはいやだ。

○長女は、自分で運転して、学校へ行くようになり、次女は運転は出来るようになったけれど、車の生活はいや！とアメリカのとび級制度を利用して、一人、スツーカーを満たして、スイスの学校へ行ってしまった。

○子供達が、ミニ独立をしはじめた頃より、アルゼンチンやブラジルの会社の仕事が多くなり、従って、地球一周程の飛行時間に疲れ果て、頂度真中あたり、マイアミに、家を購入し。ひと休みする所を作った。アルゼンチンでの家を残したまま、生活荷物など、品々を運ぶ引越しをした。プライベートビーチに面した家の中から、海を見てみると、かなり大きなペリカンが、かなり高い空から、ドサツと海に落ちて、よたよた浮かびあがり、飛んでゆくのを飽かず眺めていた。一人の家で、ひとりペリカンを眺めているのは、妙なことだったけれど、とてもおだやかで居られた。

○カリフォルニアから、日本へ。私一人の引越しをして、洗足池つぶちに住んでいた時があった。その後、王子に知人宅があり、その一軒分が空いているからと、王子神社と王子稲荷の権現山の頂上回り、ここへの坂道が、かなり好きだった。好きなことばかりして、たった一人の自分の意志のまま、引越しをくり返しこれからもきつとそうするだろう。

「三河アララギ」について

◇三河アララギ発行所 〒一五〇・〇〇一三

東京都渋谷区恵比寿三・四五・三

フオーレストヒルズ三〇二

ケイタイ 090・8434・8646

TEL 03・6765・5838

◇URL <http://imaizumiyuri.jp/>

E-mail imayurizm@gmail.com

◇三河アララギ誌は毎月発行します。

◇どなたも参加、投稿いただけます。

三河アララギ編集室 今泉由利 までご相談ください。

◇原稿は毎月末日までに、発行所まで郵送、メール、お届け下さい。

◇会費制は廃止。

◇昭和七年、三河地域のアララギ歌人が集い、創立歌会が開かれ、御津磯夫主宰「三河アララギ」誕生。

◇令和四年現在まで一号の欠刊なく、続いてきました、続いてゆきます。

◇編集・発行 今泉由利